

〈資料〉

《キャラ活》の精神分析

～「転移」を中心に～

ジュマリ・アラム

本稿は2025年9月19日に「山口大学哲学研究会」の場で発表した資料そのものである（表現・概念レベルの若干の置き換え・追記あり）。

キャラ活（「キャラクターを実体化する活動」の略）とは「主体が、何らかの媒体によって発せられる人格的リアリティから人格的イメージ（＝キャラクター）を思い起こし、そのフォローとして、同イメージを対象にした積極的な働きかけを反復的に行い、自らの人格（自我）の安定と確立に欠かせない鏡・理想像・分身なるものを実体化すること。」のことを言う。

筆者が山口大学人文学部でここ二十数年宗教学を担当している中で、もっとも重要視したテーマである。というのは学部レベルで取り上げる可能性のある宗教学の諸テーマのうち、キャラ活はおそらく大多数の学生自身が、自覚の有無にかかわらず、自分ごととして直接かかわっている日常的な精神活動だからである。

キャラクターに関する個々の実践的な活動——趣味、遊び、サブカルチャー、社会・文化的なものなのか、その文脈を問わず——を学術的に研究し、当事者にもある程度満足してもらえる説明を提供するには、精神分析（学）は欠かせない分野であると見る。

本資料で展開しているキャラ活の解説は、主にラカン派精神分析を基本的な枠組みとし（とりわけRS I / 3界構造と主体・自我・欲望・無意識のダイナミズムを説明したメビウスの帯）、それにクラインによる「対象関係」と「転移」の概念を参照しながら、筆者独自の解釈と展開を試みたものである。

キャラ活を現代日本における顕著な精神活動として、その深層心理にまで掘り下げて包括的に捉えるにあたり、筆者がもっとも重宝しているのは「転移」の原理を解明することである。この場合の転移という精神事象は、発見者であるフロイトが描いたものと比べると、本質的には変わらないが、表面的には大きく様変わりしたと言える。まず転移は医者と患者という臨床の場に限るものではなく、またその対象も生身の人間に限るものではない、という点が大きくバージョンアップされた。

キャラ活とは

➡「キャラクターを実体化する活動」の略

【最新の定義】

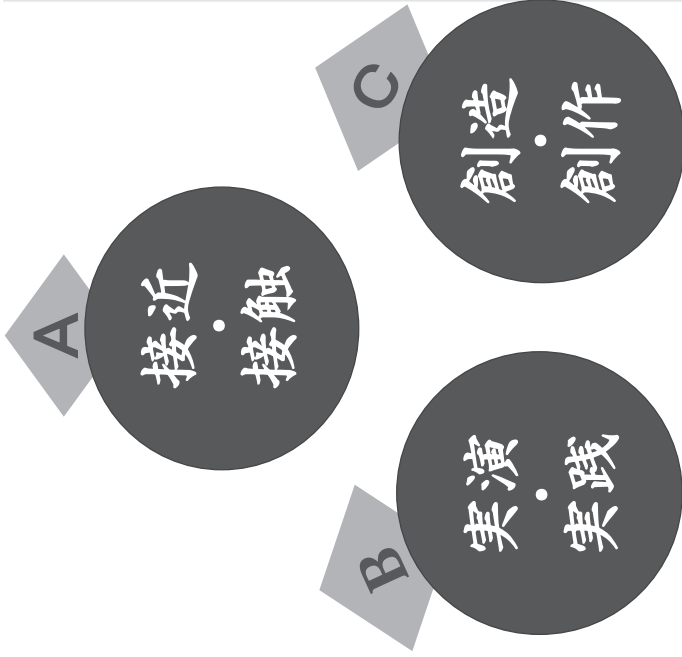
主体が、何らかの媒体によって発せられる人格的リアリティから人格的イメージ(=キャラクター)を思い起こし、そのフォロワーとして、同イメージを対象にした積極的な働きかけを反復的に行い、自らの人格(自我)の安定と確立に欠かせない鏡・理想像・分身なるものを実体化すること。

 「実体化」=身体化・物質化・視覚化

キャラ活の ジャンル

👉 働きかけのタイプ

👉 たいていのキャラ活では、ABCが重複しながら同時に行われる



キャラへの働きかけ

A. 接近／接触

↑元キャラが登場するイベント、ライブ、大会、試合、催し等に積極的にアクト・参加すること。

↑元キャラにまつわる品（フィギュアやグッズ等）を収集したい身につけたい愛用したい身辺に置きたいすること。

A. 接近／接触 (→アイドル・ファンの推し活)



【主体】物羅活子

【実世界のどある女性アイドル】人格的アイディを発する外的世界の媒体(人物・歌・容姿・声・言動・性格・ファッション等)
⇒元キャラ

【一定の女性キャラクター】主体の内的世界に構成される女性性に関する任意の人格的イメージ
⇒対象

【働きかけ】主体・活子は元キャラのライブ・コンサート・撮影会・握手会・選挙等の媒体に繰り返し参加・アクセスし、その都度、眼前の人格的

リアリティ(元キャラ)と自らが独自に構成した人格的イメージ(キャラクター)を擦り合わせてカスタマイズを試みる。そして自らの生命の鏡・理想像・分身として実感するに至ったとき、(アイドルでも活子でもない)自身の中の新たな人格(自我)を再発見しながら構成する。
⇒実体化&反復／ループ

キャラへの働きかけ

B. 実演／実践

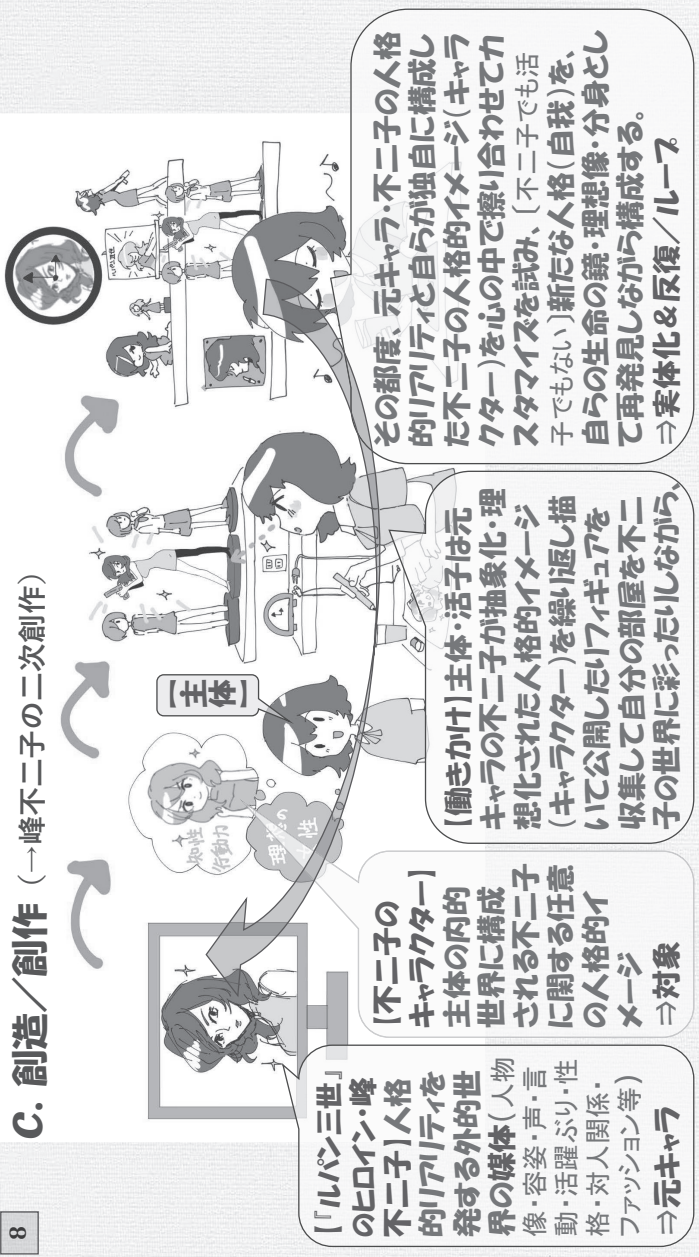
- ➡ 元キャラの外面と内面を実世界においてリアルに演じること（たとえばコスプレ・イベントのような特別・非日常的な場で）。
- ➡ 元キャラの外面と内面を実世界において自分なりに実践すること（たとえば日常生活において自分で元キャラをさり気なく重ね合わせる）。

キャラへの働きかけ

C. 創造／創作

- ↑ 元キャラには存在しない言動や振る舞い、あるいは元キャラにまつわるストーリーやエピソードを、独自に創作し公表すること（たとえば自作の物語を同人誌、ホームページ、電子掲示板、SNS等の媒体に投稿する）。
- ↑ 元キャラとは若干異なる視覚的・聴覚的なイメージを、独自に創作し公表すること（たとえば自作のイラストや動画を《上記同様》投稿する）。
- ↑ 元キャラにちなんだ品（フィギュアやグッズ等）を自作すること。

C. 創造／創作 (→峰不二子の二次創作)



キャラ活を巡る課題

A
キャラ活は
実質的に何の
活動なのか

B
人はなぜ
キャラ活を
行うのか

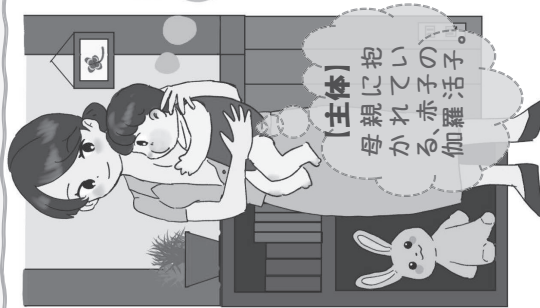
C
キャラ活は
宗教と関係
するのか

これらの課題を解明するにあたり、前掲三つの事例に精神分析的な原理がいくつが顕著に働いている点に注目しながら検討してみたい。

- ① 鏡像段階
- ② 主体・自我・イメージ・他者の関係
- ③ 三つの世界(三界)
- ④ 転移

鏡像段階～その1(無自我の段階)

ラカン精神分析の出発点となった構想。赤子(6ヶ月～18ヶ月)が母親に抱かれながら鏡の前で自分の姿を見たととき、自分が一人の人間(一つの身体・個体・生命)であることに気付く瞬間。



→生まれただばかりの赤子は、自我(=自分という意識)をもっていない。身体的にも精神(意識)的にも、自分が統一した一つの存在(一身体/一身体/一生命体)であることを自覚・実感することができない。

→身体は寸断されている、あるいはすべての存在(自然界)の一部である、というのが赤子の感覚である。赤子には、他の区別もつかない。

鏡像段階～その2(自我誕生の契機)

人間は、生まれた瞬間から「主体(性)」を有するが、「自我」は生まれてから他者や外界との関係の中で徐々に芽生えていく。自我は他者のイメージ、または他者が案内・提供・強要するイメージを自身に移入(または自己投影・同一化)することによって生まれる。



【母親の役割】

母親が何度も“カツコ”と名前を語り、指差しなどで強く誘導することでも、重要な役割を果たす。



【人間界】

物理的に人間界に“いる”だけでなく、精神的にも新参として人間界に入りきる。

→ 生まれの間もない人間・主体に、自我が形成されていくと二一ク且つ不思議なプロセス。人間の赤子だけに起こる心身の統一性と自律性を否応なしに自覚し始めるプロセス。

→ 母親の誘導もあって、鏡に映っている映像が自分であると認め始めた活子は、この瞬間を境に、自分は他者とも外界とも区別される、自立した存在であるという認識が芽生える。

→ 鏡像段階における“鏡”は、主に物理的な鏡(“身体鏡”)を想定しているが、「自我の映像」(特にその後の成長期や大人の段階)は、生身の生命体のイメージや抽象的なイメージまたは2次元・3次元イメージ、つまりキャラクター(“精神鏡”)が重要な役割を果たす。

主体、自我、イメージ、他者の関係～その1

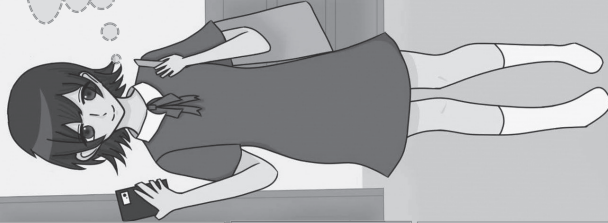
主体が「人間界の中で強制的に着せられた自我(“既定自我”)を脱いだり隠したりしながら、自らが選んだ別のイメージに着せ替えて自我(“選択自我”)を演出するという精神的な過程は、人間だれもが人間界の中で生きるために行っている活動であり、生涯続く。

人は、既定自我を完全に脱ぎ去ることはできないが、人生の節目で選択自我に着替えるため、鏡像段階の赤子が自我の映像を見る鏡に相当する、何らかの鏡を反復的に見ている。

ただし大人が見る鏡は、赤子が見るような反射鏡(身体鏡)に加え、精神的な鏡(精神鏡)が、より重要な役割を果たす。

※ 正確には赤子が経験する鏡像段階も、身体鏡を必須としているわけではなく、精神鏡(e.g. 絵や写真やスクリーンをはじめとする媒体上のイメージ)を通してでも通過できる。

【主体】「高校生の伽羅活子」
「今度の休日、お出かけの服、何にしようか……」



活子は学校では、とても地味で、目立たない女の子として知られている。といても活子自身は、凡キヤラ／

陰キヤをみなに強いられているだけであって、本当の自分は、そういうタイプの人間ではないんだと、強く自覚している。ただ活子は、自分が現在置かれている人間関係と、みなが勝手に決めてくれているキヤラクターが、不本意で、本当の自分を表していないということは、はっきり感じられるのだが、ならば本当の自分は何かなのか、どういうキヤラクターなのか、ということまでは、自分でも掴めていない。

主体、自我、イメージ、他者の関係～その2

【対象】SNS
& コンテンツ

【イメージ】
(精神鏡)

【主体】



この時点で活子は、スマホ中の地雷系のイメージ

に自分を重ね合わせており、つまり前記の事例(A、アイドル・ファンの推し活、B、ナースのコスプレ、C、不

二次創作)のように、他者が有する(他者が提供した)対象から、あたかも中味

彼女は、自身の存在に関する重要なことに目覚めたかのように、地雷系のファッション

そんな中で活子は、日頃からスマホであてもなく閲覧している画像・動画配信サイトやSNS(精神鏡)にアクセスし、ふと地雷系女子のファッションに出会ったとき、甚だしい刺激を受け、突如自分でも抑えきれない強い《欲望》に掻き立てられた。

こそが自らの個性とアイデンティティを表す器として、採用することにした。地雷系のファッションの画像から活子がイメージしたのは、なんとなくだが“自分が潜在的にもっているのに、いまの自分には表現しきれていない”人格や人間性である。すなわち漠然としながらも「個性あふれた」「感性・センス豊かな」「冷静沈着の裏に、ややワイルドで勇氣と積極性のある」人格である。

を盗み取るかのように自分なりのイメージを引き出し、自らの抑圧的な既定自我の代替物として私物化した。自我を「精神の服」に喩えるなら、活子は似合わない古着を、よりフィット感のある他者の服を盗んで着替えたのである。

主体、自我、イメージ、他者の関係～その3

地雷系のファッションを身にまとい、流行ファッションに詳しい地元の若者が集まるモールを歩く伽羅活子

【主体】

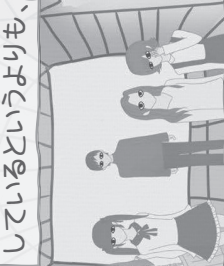
[伽羅活子]

「…周りにはみな地雷系女子だわ…

…お互いに見ろじろ見えないけど…

「…でもなぜか『みなの心の目』に映る私」が、よく見える…」

この段階で活子は、同じ場を共有する他者の視線を気にしているというよりも、



自我の可能性を示唆・気付けさせて案内してくれる《レシピ》または《判じ絵》である。実際にまともってリアルな他者に直接



晒され、他者との関係の中で人格的なイメージがある程度《実体化》されたときに、「完成した料理」または「意味が読み解かれた判じ絵」に当たる。活子にとって「地

「自分とはみなと通ずる、地雷系女子のイメージが醸し出すような自我(人格と個性)の持ち主なんだ」というリアリティの確立に必要な承認を引き出すために時間を見たと見える。活子にとって、スマホで見た地雷系のファッションのイメージは、自分がつま

地雷系のファッションのイメージ」によって獲得した自我は、このイメージにスマホでその《対象》に出会ったときから《欲望》するようになった、いまの自分に《ないもの》や《不足》を補うものである。

主体、自我、イメージ、他者の関係～その4

その後、SNSに投稿した自分の日常の自信を、他の人に見せたいという思いが、その自己イメージの裏面に投影されている。それは、SNSに投稿した自分の日常の自信を、他の人に見せたいという思いが、その自己イメージの裏面に投影されている。

ショッピングモールで成立した《眼的世界の想像上の主観的書き込みとして確実にそのリアリティが

Instagram



kyoro-k

#地雷系女子
#地雷女子

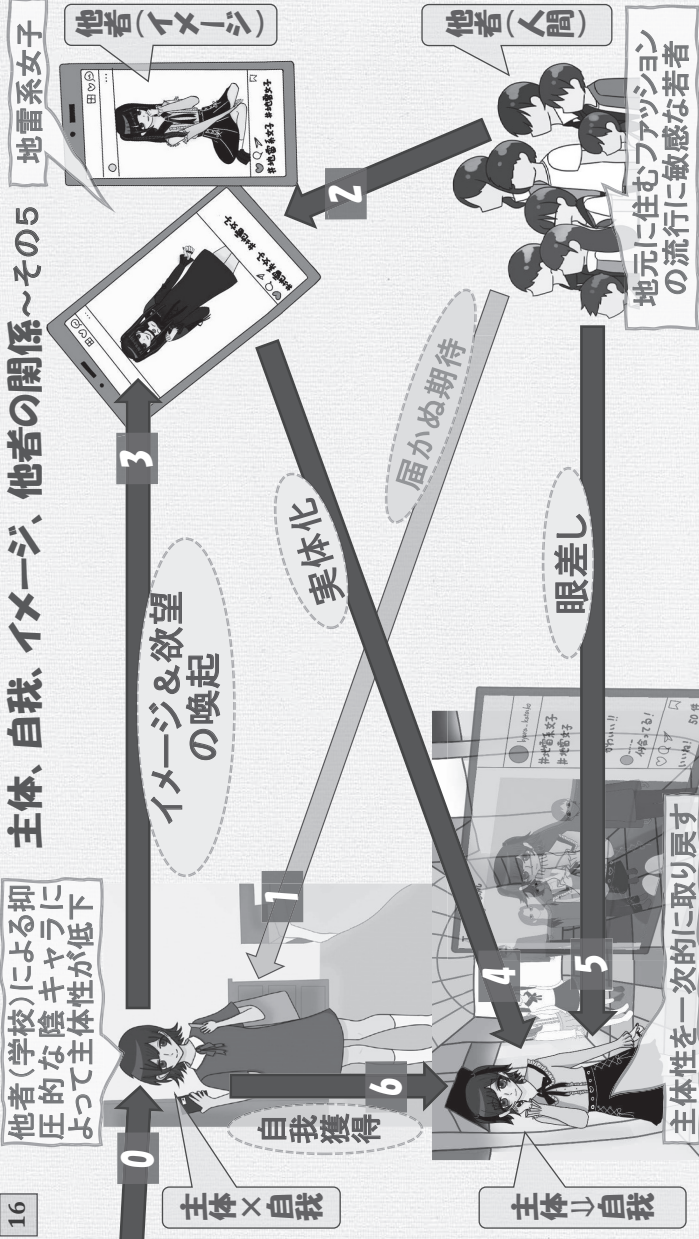
わわわわ!!
.....

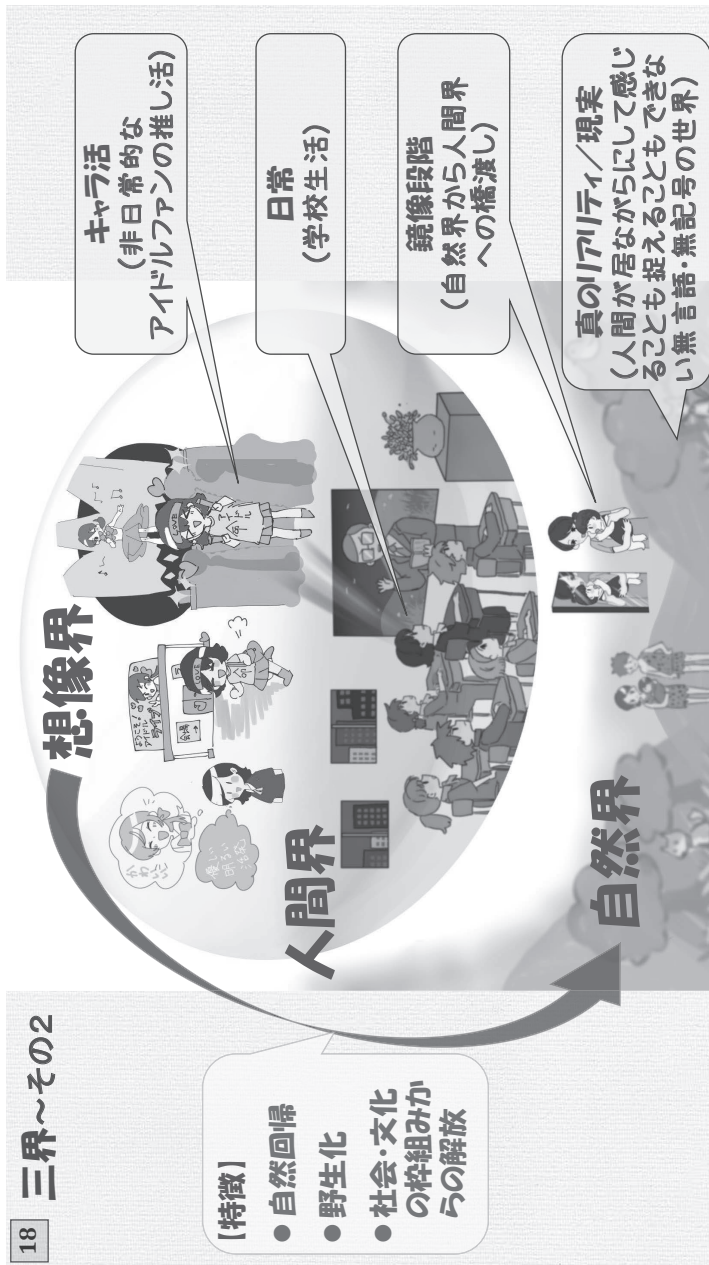
♡Q♡
いいね!

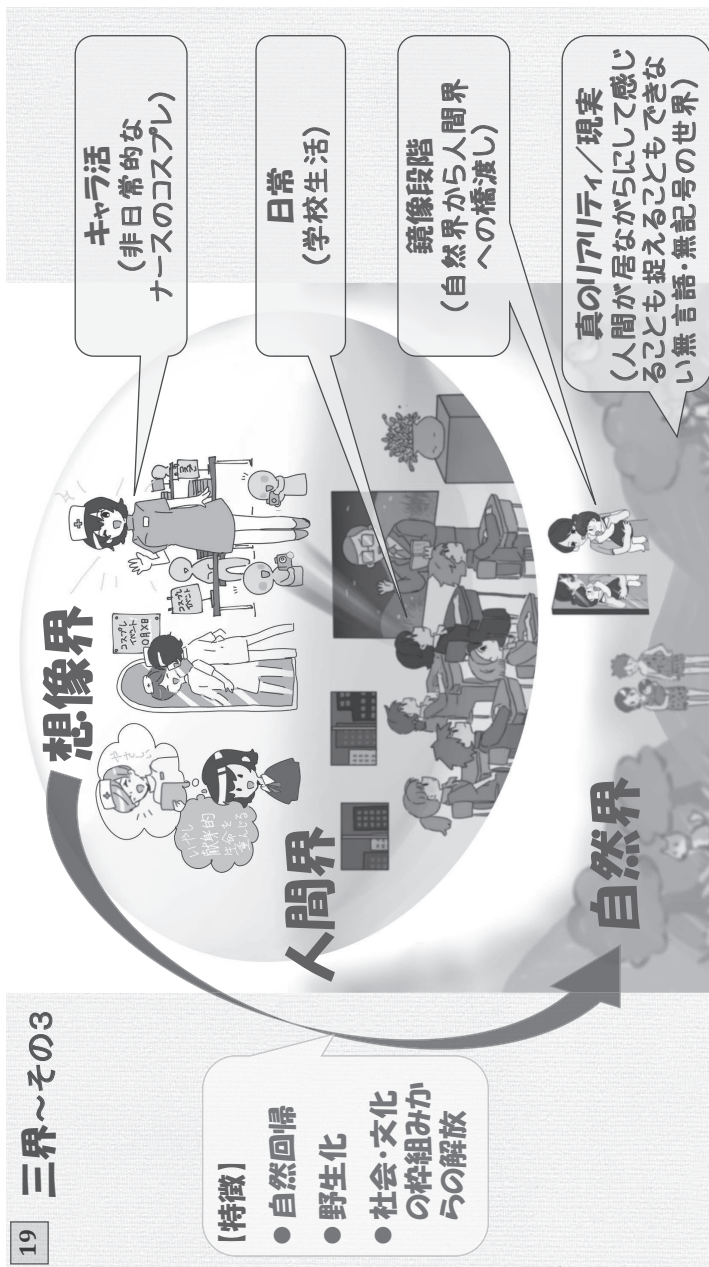
5

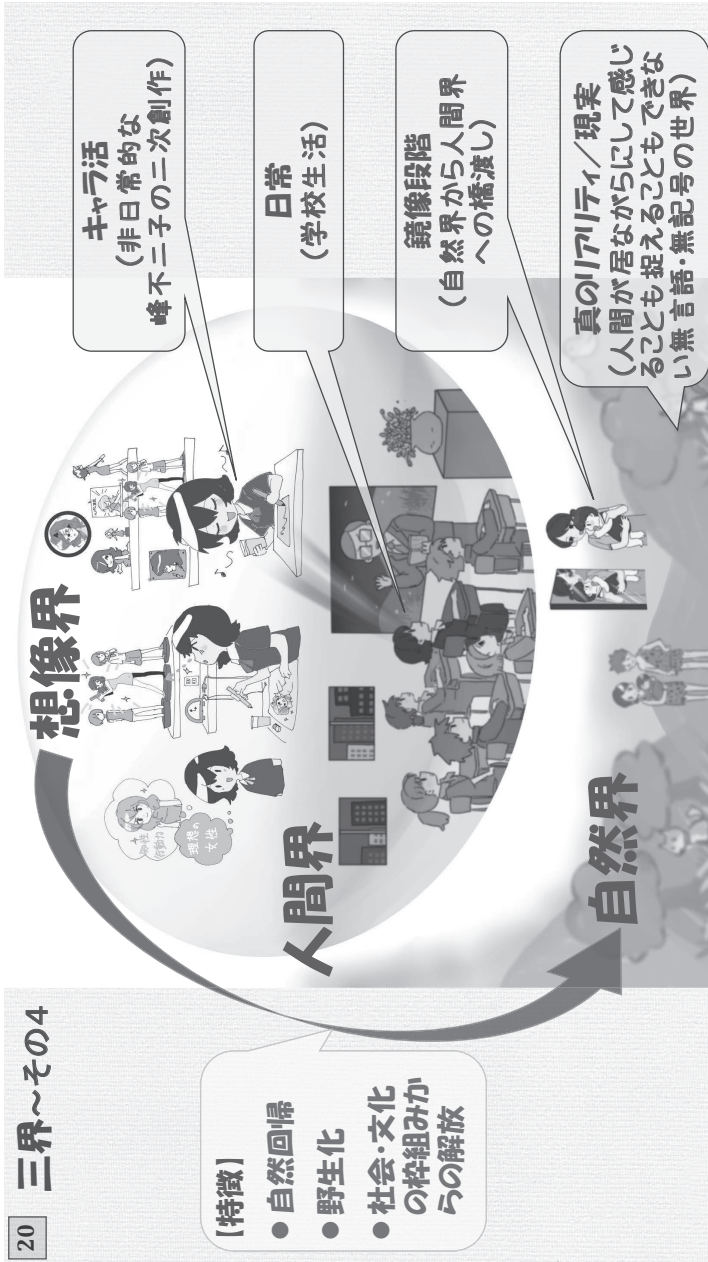
リアリティを経験する。たとえば人間界における本名や身分・素性を明したり話題にしたりせずとも、何らぎくしゃくすることなく、現実の人間関係以上に、各々が主体的になってお互いの思いや関心事を通わせることができる。似たような《現実味のある架空ネットワーク》は、コスプレイベントの場において、さらにリアルに見られる。架空人物になり切った初対面の主体たちが、架空人物のままでも主体性をもって熱く交流できる。

確認できる。このとき活子がアクセスするイメージは、独りよがりでも自己満足でもなく、他者とともに一つの世界を構成している。活子を含む多数の足が、人間界における日常と接点のない別人として、お互いの繋がりが共有のり









主体の意識にのぼらない欲望が、特定の他者との出会いを契機に強烈なイメージとして喚起され、投影同一化を促し、こうした体験から主体が同他者との継続的な対象関係を結ぼうとす精神作用。

【1】基本：転移／transferenceとは何かが何から何へ移る？
 ① 主体の無意識のある部分が意識へ。

② 言語化(意識／気づく／把握)できないものからできるものへ。
 ③ 自然界(人間が居ながらにして感じることも捉えることもできない無言語・無記号の世界)の欠片(かけら)を人間界の実体へ。つまり転移とはそれ自体が、通常つながらることのできない領域とつながるといふ非日常的な体験。→自然回帰／聖俗循環の体験

主体の意識にのぼらない欲望が、特定の他者との出会いを契機に強烈なイメージとして喚起され、投影同一化を促し、こうした体験から主体が同他者との継続的な対象関係を結ぼうとする精神作用。

【2】欲望？

- ☞ 主体の欠如や抑圧(人生の曇り)に根差す心の働き。
- ☞ 対象(他者)によって刺激される(目覚めさせられる)。
- ☞ 欲望は自然界と人間界の相容れない関係の上に成り立っているため、完全に満たされることはない。
- ☞ → 最大の欲望は自然回帰すること。
- ☞ → 主体の欲望＝他者(人間界の構造)の欲望。
- ☞ 【キャラ活の場合の欲望？】真剣に行っている大抵の主体にとっては、次のようなものではない: アイドル/ナース/アニメのヒロイン「になりたい」「のような彼女が欲しい」

主体の意識にのぼらない欲望が、特定の他者との出会いを契機に強烈なイメージとして喚起され、投影同一化を促し、こうした体験から主体が同他者との継続的な対象関係を結ぼうとす精神作用。

【3】他者？

- ☞ 主体にとつての対象(外的対象)。
- ☞ 生身の生命体(人・動植物)、モノ、2次元的・抽象的な実体。

【4】イメージ？

- ☞ 主体が対象関係の中で他者(外的対象)を内面化し、擬人化(人間生命化)しながら内的対象に転換した心像。

【5】対象関係？

- ☞ 主体が他者(外的対象)を内面化し、その結果として喚起されるイメージ(内的対象)との関係が、自らの人格(自我)を形成する過程。

主体の意識にのぼらない欲望が、特定の他者との出会いを契機に強烈なイメージとして喚起され、投影同一化を促し、こうした体験から主体が同他者との継続的な対象関係を結ぼうとする精神作用。

【6】投影同一化？ ※クライン、ピオンを参照

対象関係にある主体が、イメージとして喚起された欲望に伴って生じる無秩序・未分化な感情を、関係相手である対象(他者)に押し付けて体験させ、自らはあたかもその受容者の立場へと転じ、転嫁した感情を逆に他者から、統制のとれたものとして受け取る。

【7】補足：他者(外的対象)の機能 ※コフートを参照

☞《鏡転移》他者は主体にとって内面の鏡

☞《理想転移》他者は主体にとって理想像

☞《分身転移》他者は主体にとってもう一人の自分

フロイト以来、転移には陽性的なもの（陽性転移）と陰性的なもの（陰性転移）の二種のかたちをとって生じるものだと理解されていた。

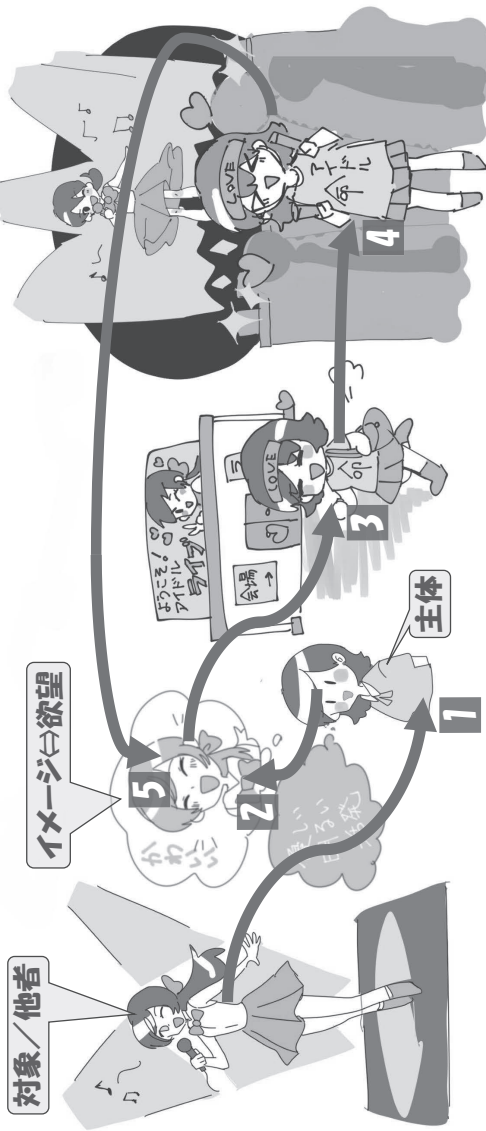
陽性転移

☞ 主体が、欲望のきっかけである対象を呼び寄せたり近づいたりするかたちで対象関係を維持しようとする場合のことを言う。好意や愛情の感情が伴う場合が多い。

陰性転移

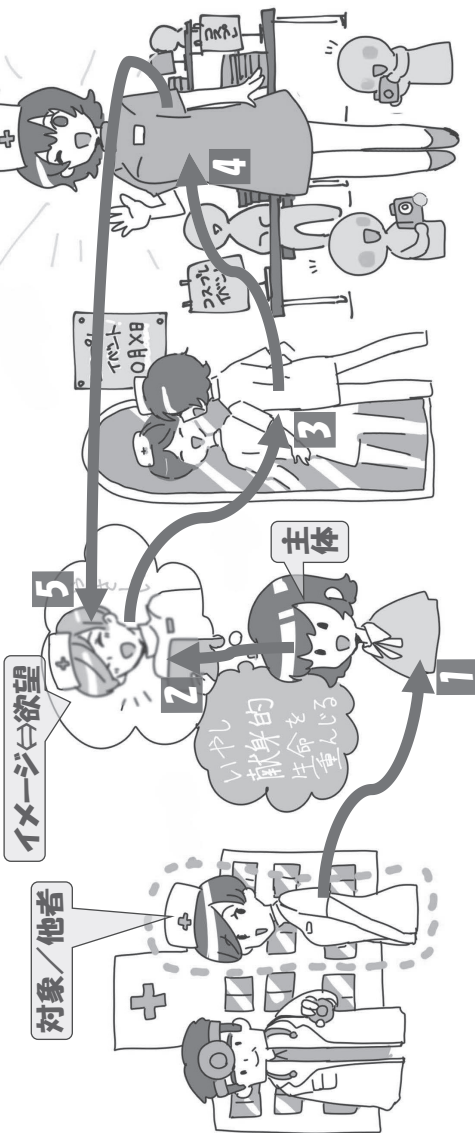
☞ 主体が、欲望のきっかけである対象を敵視したり忌避（タブー視）したりするかたちで対象関係を維持しようとする場合のことを言う。憎悪や嫌悪の感情が伴う場合が多い。

転移～その5(→アイドル・ファンの推し活)



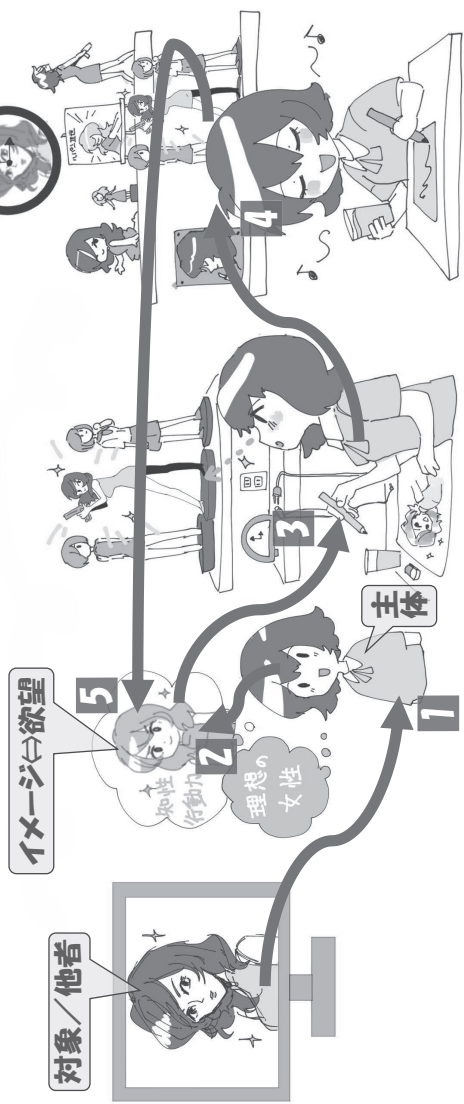
主体の意識にのぼらない欲望が、特定の他者との出会いを契機に強烈なイメージとして喚起され、投影同一化(3,4)を促し、こうした体験から主体が同他者との継続的な対象関係(1～5)を結びとどする精神作用。

転移～その6(→ナースのコスプレ)



主体の意識にのぼらない欲望が、特定の他者との出会いを契機に強烈なイメージとして喚起され、投影同一化(3,4)を促し、こうした体験から主体が同他者との継続的な対象関係(1～5)を結びとどする精神作用。

転移～その7（→峰不二子の二次創作）



主体の意識にのぼらない欲望が、特定の他者との出会いを契機に強烈なイメージとして喚起され、投影同一化(3,4)を促し、こうした体験から主体が同他者との継続的な対象関係(1～5)を結びとどする精神作用。

キャラ活を巡る課題～まとめ

A
 キャラ活は実
 質的に何の
 活動なのか

特定の対象に転移を重ねる過程を通じて、主体が自らの心身に対する統制権と主導権を回復しようとする試み。

B
 人はなぜ
 キャラ活
 行うのか

出会った対象が、自らの生命を映し出す鏡であり、理想像であり、分身でもあるかのように立ち現れ、抑圧から抜け出す道を示してくれと感ずるため。

C
 キャラ活は
 宗教と関係
 するのか

【仮説】宗教の神髄を「聖と俗のつながり」(俗を生の基盤とする人間が聖なるものとながる媒体)と見るならば、想像界(媒体)を介して自然界(聖)につながる／回帰しようとする人間界における人間の活動は、宗教的な行為・活動に相当する。